



Title	言葉を理解するとはどういうことか? : §9 問答と焦点 コリングウッド・テーゼの証明
Author(s)	入江, 幸男
Citation	
Version Type	AM
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/14246">https://hdl.handle.net/11094/14246</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

### 【前回の復習と訂正】

#### 1、ダメット意味論の欠点？

ダメットの意味論の欠点の一つは、反証ないし検証が観察命題について可能であると主張しているが、それがどのようにして可能になるのか、論じられていないようと思われることである。

#### 2、直観主義論理の説明

直観主義論理では、次の5つを使用できない。

①二重否定消去 ( $\neg\neg p \vdash p$ )

②排中律 ( $p \vee \neg p$ )

③背理法 (仮定 $\neg p$ から矛盾が生じれば、 $p$ を主張できる)

④ $\neg q \rightarrow \neg p \vdash p \rightarrow q$  (対偶のひとつ)

⑤ $\neg (p \& q) \vdash \neg p \vee \neg q$  (トモガソンの法則)

しかし次は使用できる。

$p \vdash \neg\neg p$  (二重否定導入)

$\neg\neg p \vdash p$

$p \rightarrow q \vdash \neg q \rightarrow \neg p$  (対偶の一つ)

$\neg p \& \neg q \vdash \neg (p \vee q)$  (トモガソンの法則)

$\neg p \vee \neg q \vdash \neg (p \& q)$  (トモガソンの法則)

$\neg (p \vee q) \vdash \neg p \& \neg q$  (トモガソンの法則)

### 3、直観主義論理による超越論的論証の批判

直観主義論理を採用するとき、おおくの超越論的論証は成り立たなくなる。

①超越論的語用論的的前提が成立しないならば、コミュニケーションは成立しない。

②ところで、コミュニケーションは成立している。

③ゆえに、超越論的語用論的的前提が成立している。

これは、上記の④を利用している推論なので、直観主義論理では認められない。もし討議倫理が、最小論理（直観主義よりさらに弱い論理）を上記のような超越論敵論証によって正当化するのならば、その論証は成り立たない。

## § 9 問答と焦点 ——コリングウッド・テーゼの証明——

参考文献：

入江幸男「問答の意味論と基礎付け問題」、『大阪大学文学部紀要』第37号、pp.153-190、1997年3月

入江幸男「発話伝達の不可避性と問答」、『大阪大学文学部紀要』第43号、pp.1-48、2003年3月所収

Yukio Irie, 'A Proof of Collingwood's Thesis' in *Philosophia Osaka*, Nr. 4, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 69-83, 2009/3

コリングウッド (R. G. Collingwood) は、『自伝』で次のように主張している。

「[ひとが語ることの]意味を見いだすためには、彼が語ったり書いたりしたことがどのような質問（彼の心の中の質問、そして彼によってあなたの心の中にあると想定されていた質問）への答えとして意味されていたのかを知る必要がある。」<sup>1</sup>

彼の別の書物では、次のように述べている。「誰がおこなうものであれ、すべての言明は、質問に答えることして行なわれる。」<sup>2</sup>我々は、彼のこのような主張を「すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」というテーゼに定式化することができるだろう。これをコリングウッド・テーゼ (CT) とよびたい。この主張は哲学の多くの領域で重要な帰結をもたらす重要なものであるが、しかしコリングウッドはこれの厳密な証明を与えていないように思われる。この章では、コリングウッド・テーゼの厳密な証明を与えてみたい。

我々は、CTを言語学における焦点の概念に注意することによって証明したい。その証明のために、次の二つを証明しよう。

テーゼ1 「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」

テーゼ2 「焦点の位置は、質問と答えの間の関係によって決定される」

もし、我々がこの二つのテーゼを証明したなら、そこから簡単にCTを演繹できるだろう。

CT 「すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」

テーゼ1の証明にとりかかる前に、「焦点」について説明しておきたい。

## 1、焦点とは何か

文は、一語文を除くと、普通は多くの語から出来ている。文を構成する多くの語の関係は、統語論的 (syntagmatic) と呼ばれる。例えば、英語のSVCとかSVOCというような関係である。他方で、文を構成する名詞や動詞は、それぞれ同種の類似の語との関係の中で意味をもつ。例えば、色を表す様々な語「赤」「青」「黄色」「緑」などの関係である。この関係は、パラダイム的 (paradigmatic) と呼ばれる。我々が、文を作るためにパラダイム的関係にある同種の多くの語の中から一つの語を選択するとき、我々はそれを「他でもなくこれ」というような仕方で選択する。「SはPである」という文の場合に、SもPも「他でもなくこれ」という仕方で選択されている。しかし我々は文を構成するすべての語のこのような選択性を意識することは出来ない。我々は一つの語ないし句の選択性だけを意識できる。二つないしそれ以上の語についてその選択性を同時に意識しようすることは大変複雑な努力を必要とする。我々がたとえ二つの語の選択性を意識するとしても、我々はそれらを同時に意識することはできない。我々はそれらを順番に意識しなければならない。これは、ゲシュタルトの知覚における地と図の構造に似ている。たとえば、有名なウサギとアヒルの反転図形の場合、我々はそれをウサギとして見ると同時にアヒルとして見ることは出来ない。これと同様に、例えば「リンゴが赤い」という言明の場合に、「桃でも、オレンジでも、ナシでもなく、他でもなくリンゴが」というように「リンゴ」に焦点をおいて理解することも出来るし、また「青でもなく、黄色でもなく、緑でもなく、他でもなく赤い」というように「赤い」に焦点をおいて理解すること

<sup>1</sup> R. G. Collingwood, *An Autobiography*, Clarendon Press Oxford, 1978, p. 31.

<sup>2</sup> R. G. Collingwood, *An Essay on Metaphysics*, Clarendon Press Oxford, 1998, p. 23. Gadamar は、「問答の論理学」というコリングウッドのアイデアに言及して、それを基礎にして解釈学の方法を展開した。Cf. Hans-Georg Gadamar, ‘Wahrheit und Methode’, the 4. edition, J. C. B. Mohr Tuebingen, 1975, pp. 351-360.)

もできる。しかし、我々はこれらの二箇所に同時に焦点をおいて理解することはできない。なぜなら、「リンゴ」を主語に選んだ後でしか、「赤い」を選ぶことは意味をなさないし、また「赤い」を述語に選んだ後でしか、「リンゴ」を選ぶことが意味をなさないからである。我々は主語と述語を同時に選択することは出来ない。焦点は、このような理由によって、一つの言明の中の一箇所だけに置かれる。「SはPである」という文は、二つの仕方で理解可能である。一つは「S」に焦点が置かれて、「(他でもなく) SがPである」と理解される場合であり、もう一つは、「P」に焦点が置かれて、「Sは(他でもなく) Pである」と理解される場合である。(実は、焦点の位置と「は」と「が」の使い分けが関連しており、これについては後で論じる。)

## 2、「焦点」と他の類似の概念との違い

ここでは、「焦点」の概念を明確にするために、他の類似の概念と「焦点」との違いを確認しておきたい。

### (a) Theme と Rhemeの区別 (Prague School)

「主題部」(theme)は、「叙述部」(rheme)に対立する概念である。それは、文頭に置かれる要素のことである。(池上嘉彦『意味論』大修館書店、1974年 p. 340、M. A. K. Halliday, 'Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration and Modality and Mood in English,' *Foundation of Language*, 6.)しかし、「焦点」は常に文頭に置かれるわけではない。この点で「焦点」と「主題」は異なる。

首相は、衆議院を解散した。

<主題部> <叙述部>

衆議院は、首相によって解散された。

<主題部> <叙述部>

### (b) 新情報と既知情報の区別

文の内容は、文脈上、既知情報と新情報に分かれる。

「誰が、asa400のフィルムを買いましたか」

「彼が、asa400のフィルムを買いました」

この文の内容は、つぎのような既知情報と新情報に分かれる

「彼が、asa400のフィルムを買いました」

<新情報> <既知情報>

先の主題部と叙述部の区別と、新情報と既知情報の区別は異なる。新情報は、主題部にも叙述部にも登場するからである。次のような問答では、叙述部の方が新情報となる。

「彼は、何を買いましたか」

「彼は、asa400のフィルムを買いました」

既知情報 <新情報> 既知情報

ちなみに、新情報と既知情報に分かれる文は、主張文にかぎらない。約束や命令の発話文も、問い合わせに対する答であるときには、このようにわけることができる。

「何をおもとめですか」

「asa400のフィルムをください」

<新情報> <既知情報>

3 チョムスキーは、既知情報と新情報の区別を、「前提」presupposition と「焦点」focus とよぶ。

Is it JOHN who writes poetry?  
It isn't JOHN who writes poetry?  
No, it is BILL who writes poetry.

普通のイントネーションでは、大文字の語が、主強勢をうけ、ピッチ曲線の最大抑揚点となる。これらのJOHN,BILLは、焦点であり、その文は、誰かが詩を書くことを前提としている。チョムスキーは焦点の区別を次のように説明している。<sup>4</sup>

Bill likes JOHN.  
BILL likes John.

これらの文の焦点の区別は、次のように表示される。

the x such that Bill likes x -- is John  
(ビルが x を好きであるような x は、ジョンだ)  
the x such that x likes John -- is Bill  
(x がジョンを好きであるような x は、ビルだ)

この二つは、次の日本語の表現に、近いと思われる。

「ビルが好きなのは、他でもなくジョンだ」  
「他でもなくビルが、ジョンを好きである」

チョムスキーの焦点もまた、文のある構成部分のパラダイム関係に注目している箇所のことであると思われる。

さて、チョムスキーがいうように、新情報と旧情報とは、焦点と前提の箇所と一致するだろうが、しかし、これらは厳密には区別されるべき概念である。新情報と旧情報とは、コンテクストに依存した語用論上の概念であり、後者は一つの発話の意味の内部構造に関する、意味論上の概念だからである。（両者の違いの一つは、すべての発話は焦点と前提の区別を持つが、すべての発話が新情報と旧情報の区別をもつとは限らない、ということにあるだろう。これは、久野が以下で指摘していることから主張できる。）

### 付注：「は」と「が」の用法

「は」と「が」の使い分けは、幼児でもできるのだが、しかしその使い分けの規則については、いまだに定説といえるものがないようである。以下では、蛇足になることをおそれつつも、焦点との関係に注目して、一つの仮説を提案したい。

「が」は未知の語を承け、「は」は既知の語を承ける、という説がある。ここでいう、未知の語と既知の語は、先の新情報と既知情報の区別とおなじものであろう。

「s が、p である」  
新情報 既知情報

この文の「s」が新情報であるならば、「p である」は既知情報であることにな

<sup>3</sup> Cf. Noam Chomsky, 'Conditions on Rules of Grammar' in *Essays on Form and Interpretation*, Elsevier North-Holland, Inc., 1977. 参照、チョムスキー『生成文法の意味論研究』安井稔訳、研究社、p.113

<sup>4</sup> チョムスキー『形式と解釈』安井稔訳、研究社、p.297。

るだろう。

「sは、pである」

既知情報 新情報

この文の「s」が既知情報ならば、「pである」が新情報であることになるだろう。

ところで、この説の欠点は、山田みどりによれば、次の二点である。<sup>5</sup>

1、「が」は既知のものをも承ける場合がある。

例えば、「今泣いたカラスが、もう笑った」において、「今泣いたカラス」は、話し手も聞き手も承知している人物であると言えよう。

2、既知と未知の区別のみでは、従属節中に「は」を使えない節があることの説明がつかない。

主語節・連体修飾語節中では、「が」のみが使われる。

たとえば、「海が一番穏やかなのは七月でしょう」

「私が出かけようとする時に彼がやってきた」

1の批判に関しては、久野あきらによるanaphoricityと新情報との区別についての次の指摘よって反論できるだろう。

「与えられた構成要素が、その文の中で新しいインフォメーションを表すか、古いインフォメーションを表すかという概念は、その構成要素が指す事物がすでに話題にのぼったことがあるか否かという概念(anaphoricity)とは別のものである。」<sup>6</sup>

しかし、2の批判に答える事ができない。そこで、私は次のような修正を提案したい。新情報と既知情報の区別と焦点と前提の区別は、前者が語用論上の区別であり、後者が意味論上の区別であり、異種のものである。しかし多くの場合、新情報と焦点の位置が一致することもまた事実である。文を発話する時の意図は、多くの場合、新情報を伝えようすることにあるので、当然そこに焦点がくる。そうすると、上の未知／既知情説は、つぎのように言い換える事ができるだろう。「が」は焦点を表示し、「は」は前提を表示する。しかし、このままでは、やはり従属節中では、「は」がほとんど使用されないことを説明できないので、これをさらに次のように修正して、焦点説と呼ぶことにしたい。

焦点説：「は」は、文(ないし節)の後続部分のどこかに焦点があることを示す。

「が」は、文(ないし節)の後続部分のどこにも焦点がないことを示す。

これによって、2の批判に関しては、次のように答えることができる。「は」は、後に続く部分に焦点があたることを表示するものであり、複文中の従属節には、焦点があたらないので、複文中の従属節には「は」をもちいることができないのである。「が」は、その前の部分に焦点があることを表示するのではなくて、むしろ後続部分に焦点がないことを表示するのだとすれば、従属節中に「が」が用いられることをうまく説明できる。

従属節の中に焦点がおかれることがないということは、次のように説明できるだろう。その理由

<sup>5</sup>山田みどり「助詞」『研究資料日本文法 5』明治書院、所収。

<sup>6</sup>久野あきら『日本文法研究』大修館書店、1973、p.209.

は、もし従属節中の一部に複文全体の焦点を起きたいのならば、そのことは、本来的には従属節ではなくて、主文として語られるべきである、ということであろう。もし、従属節中の一部に焦点が置かれても不自然にならないのだとすれば、それは「従属度の低い従属節」の場合に限られるだろう。そして、この予測は、「従属度の低い従属節の場合」には、「は」も「が」も使われることがある、という指摘と一致する。そのような従属節としては、引用節の「……と」、接続節の「……けれど」「……が」など、理由節の「……から」「……ので」「……のに」など、の例が指摘されている。<sup>7</sup>

「雨がふっている」という文の場合には、「雨が」の後続部分に、焦点がないとすれば、「雨」に焦点があることになる。「ぼくは、花子が好きだ」という文では、「ぼくは」の後続部分に、焦点があつて、しかも、「花子が」の後続部分に焦点がないとすれば、「花子」に焦点があることになる。

「彼は逮捕されませんでした」とは言えるが、「彼が逮捕されませんでした」ということは不自然な感じがする。なぜだろうか。おそらくは、否定文の場合には、焦点は否定にあることが多いために、「彼が」とすると、それに続く部分には焦点がないことを示すことになり、矛盾するように感じられるのである。

つぎのような例も、「は」は、後続部分に焦点があることを示しているという仮説と一致するのではないだろうか。「そこへハいくな」「寒くハない」「行くことハ行く」「うかうかハできない」「中学生としてハ立派」

### (c) 焦点と深層構造

チョムスキーは、焦点と前提の区別は、深層構造によっては、規定されていないと考えていた。日本語の「は」と「が」の区別もまた、深層構造によって規定されていないようにとおもわれる（参考、池学鎮「「は」と「が」を持つ文の二重の主語について」語学教育研究論争、第6号、pp.10-28）という指摘もある。

ところで、焦点ー前提の構造が文の意味構造上、重要であるとすれば、それは、何らかの構文論上の区別になって現れるはずであると考えられるかもしれない。しかし、そうではない。もし焦点ー前提構造が、構文論上の区別になって現れるとすると、焦点ー前提の構造は、コミュニケーションや問答を離れて、一つの文をそれだけ取り出したときにも確定しており、コミュニケーションに依存しないことになる。そうすると、新情報／旧情報の区別は、コンテキストに依存するので、焦点ー前提の構造と、新情報／旧情報の区別が対応しなくなる。同じ文の発話が、異なる焦点を持つのだとすると、焦点ー前提の区別は表層構造には現れることはないとされるはずである。もし焦点ー前提構造が重要ならば、それは深層構造を規定しているはずだ、ということになるのだろうか。（この議論は、生成文法が深層構造という概念を放棄しているので、いまや不要かもしれない。）

## 3、テーゼ1の証明

テーゼ1 「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」を証明するために、ここで二つのテーゼを証明しよう。

<sup>7</sup> この用例は、坂野信彦「ハとガの本義と使い分け」中京大学教養論叢、第23巻第3号p.8にあるもの。

## (1) テーゼ a 「焦点位置の差異は、発話の意味にとって必然的なものである」

上に述べたように、新情報と既情報の区別によって、なぜ言明のある部分に焦点が当てられるのかを、説明することが出来る。話し手は、ある部分が新情報であり、聞き手がその部分に新情報があることがわかるように、その部分に焦点を当てて文を発声する。新情報と既情報の区別は文脈に依存している。それゆえに、これは文の意味にとって偶然的につけられた弁別であるように見え、文の意味の内的構造に本質的なものは見えない。ところで、焦点と前提の区別は、多くの場合、新情報と既情報の区別と実質的には一致している。それゆえにひとは、新情報と既情報の区別が文の意味にとって偶然的であるように、焦点と前提の区別もまた文の意味にとって偶然的であると思うかもしれない。しかし、それは事実ではない。我々はそれを以下に証明しよう。

焦点位置の差異は、文の意味が確定した後にある文脈の中の文に付け加えられる偶然的な要素なのではない。なぜなら、もし我々が例え「SはPである」と考えるとき、我々は必然的に「(他でもなく) SはPである」か「Sは(他でもなく) Pである」かのいずれかの意味で理解する。これはゲシュタルト心理学における図形の知覚と大変よく似ている。たとえば、我々がルービンの図形を見るとき、我々はそれをカップとしてみるか、あるいは向き合った二つの顔としてみるかのいずれかである。しかし、焦点位置の差異は、心理学的なものではなくて、論理的なものである。私はそのことを次に示そう。

## (2) テーゼ b 「焦点の区別は、意味の論理的な区別である」

焦点の区別が、意味の論理的な区別であることを示せば、そのことは、焦点の区別が発話の意味にとって、付帯的なものではなく、本質的なものであることの証左になる。

「sがpである」と「sはpである」の焦点の区別は、従来の論理学では無視されてきた。これはおそらく情緒的なニュアンスの差異の一部と考えられてきたためであろう。しかし、これは情緒的な意味ではなく、論理的な意味の区別である。たとえば、次のような三段論法を考えよう。

mはpである (大前提)

sはmである (小前提)

ゆえに、sはpである。 (結論)

これらの文の焦点を示せばどうなるだろうか。このままでは、(日本語の「ハ」と「ガ」の区別をしないとすると)どのようにでも焦点をつけられるように思える。ところが、この推論が、次のような問に対して答えるためのプロセスであると考えるときには、焦点は明確になる。たとえば、次のようになるだろう。

「sは何か?」

sは(他でもなく) mである (小前提)

mは(他でもなく) pである (大前提)

ゆえに、sは(他でもなく) pである。 (結論)

「sは何か?」という問の焦点は、「何か」の部分にある。そして、その答が何であれ、答の発話でも、「何」にあたる部分、つまり述語の部分に焦点があたるだろう。そこで、結論「sはpである」では「pである」に焦点があたることになる。「sは何か?」と問われて、まず「sはmである」と考えたとすると、ここでは、sは既知情報なので、新情報である「m」に焦点があたること

になるだろう。これに続いて、次に「mは、pである」と考えたとすると、ここでは「m」は既知情報になっており、「p」が新情報なので、「p」に焦点があたることになるだろう。そして、次に結論が導出されることになるだろう。ここで、大前提と小前提の順序が逆になることはないと思われる。なぜなら、「sは何か」と問われて、次に「s」が登場しない「mはpである」が思い浮かぶということは、不自然だからである。これに対して、次の問に対して三段論法が行われるときには、焦点と前提の順序は変化するだろう。

「何がpか？」

（他でもなく）mがpである（大前提）

（他でもなく）sがmである（小前提）

ゆえに、（他でもなく）sがpである（結論）

この問答では、問の「何が」に焦点があり、それゆえに、答である結論では、「s」に焦点がなければならぬ。「何がpか」と問われて、「mがpである」と思いつくときには、新情報である「m」に焦点があたるだろう。つぎに「sがmである」と考えるときには、「m」は旧情報になっており、新情報である「s」に焦点があたるだろう。そして次に結論が導出されることになるだろう。

このようにして、焦点の区別を考慮して、はじめて推論プロセスが明確になること（少なくともそのような場合が存在すること）がわかる。したがって、推論を構成しているこれらの文の焦点は、情緒的な意味をもつのではなくて、論理的な意味を持つ、といえるだろう。

### （3）予想される反論

我々が推論を行なうときの思考のプロセスを説明するには、焦点の区別が重要な働きをなしている。しかし、それは＜思考のプロセスとしての推論＞について言えることであり、＜命題の論理的関係としての推論＞について言えることではない。例えば、命題の論理的関係としての＜妥当な推論＞とは、＜前提が真であるならば、結論が真である推論＞ということである。＜妥当な推論＞であるかどうかの判定では、前提の真理が結論で保存されるかどうかが問題であり、焦点は問題ではない。（このような反論には、Brandamのような発想で答えることできるだろう。つまり、＜真理を保存するのか妥当な推論なのではなくて、妥当な推論の中で保存されるものが真理である。＞このアイデアをどう生かすかは、今後の課題である。）

## 4、テーゼ2の証明

ここでは、テーゼ2「焦点の位置は、問答関係によってのみ確定可能である」を証明したい。焦点の位置が、最もはつきりするのは、つぎのような問答関係においてである。

「何がpか」 「（他でもなく）sが、pである」

「sは何か」 「sは、（他でもなく）pである」

焦点の位置や意味は、その命題がどのような補足疑問文（wh疑問文）の答えであるかを知ることによって明確にすることができます。このことは、主張型発話が返答となる問答に限らない。行為指示型（命令、依頼など）の発話の焦点もまた、次のように問答において明確になる。

「どれを捨てるのですか」 「（それではなくて）これを捨てなさい」

「これをどうするのですか」 「これを（しまっておくのではなくて）捨てなさい」

行為拘束型（約束）の発話の焦点も、次のように問答において明確になる。

「誰か走ってくれますか」 「私が走ります」  
「あなたは何をするのですか」 「私は走ります」

したがって、我々は、「ある発話がどのような補足疑問に対する答えであるかを理解できるならば、その発話の焦点を理解でき、また逆に、ある発話の焦点を理解できるときには、それを答とする補足疑問を立てることができる」と主張することはできるだろう。

しかし、これだけでは、まだ「焦点は、問答関係によって<のみ>確定可能である」ということの証明にはならない。この<のみ>を証明するにはどうすればよいだろうか。焦点は、文のある構成要素のパラダイム関係に注目することである。いいかえれば、焦点は、文のシンタクスを構成するある構成要素の値が、「他でもなく、これである」ということに注目するのであり、そのような構成要素の値への注目を促すのは、それを尋ねる補足疑問を問うことに他ならないと言えれば、上の<のみ>を証明できたことになるだろう。

スペルベル&ウィルソンは、「陳述は関連性のある疑問を呼び起こすことがよくある。例えば、もし私があなたに私は不幸せだと言えば、ほとんど確実にどうしてだろうという疑問をあなたに生じさせるだろう」と指摘し、これと同様に、発話の理解の途中において、聞き手には関連性のある疑問が生じて、それに答えるというやり方で、発話の理解が進むのかも知れない、と述べている。

彼らが挙げている例を少し簡略にして紹介しよう。<sup>8</sup>

Jenniferr confessed to STEALING. (ジェニファーは盗みを認めた)  
という発話において、聞き手は"Jennifer"を聞き、名詞句(NP)という統語範疇を付与するとすぐに動詞句(VP)が続くと考えて、次のような予想仮説を立てる。

Jennifer did somthing. (ジェニファーは何かをした)

これは、聞き手に次のような疑問を起こさせる。

What did Jennifer do? (ジェニファーは何をしたんだろう)

次に聞き手が"confessed to"を聞くと、名詞句(NP)が続くと考え、次のような予想仮説を立てる。

Jennifer confessed to something. (ジェニファーは、何かを白状した)

これは、聞き手に次のような疑問を起こさせる。

What did Jennifer confess to? (ジェニファーは、何を白状したんだろう)

そして、これに対する答えとして盗みに焦点のあたった発話の理解が成立する。

Jennifer confessed to STEALING.

もちろん、このような問答は、実際に行われているとしても、ごく短い時間で行われることになり、意識されないだろう。そして、スペルベル&ウィルソンは、発話の理解がこのようなプロセスで成立する、可能性を指摘しているだけであり、つねにこのようなプロセスが生じていると証明しているのではない。

しかし、ここで次のことを思いおこそう。ある焦点を理解することは、ある値をパラダイム関係の中からの選択の結果として意識することなのである。このような選択は、「なに」や「どれ」への答えとして「他でもなく、これを」というように返答することに他ならない。もし選択がこのようにしてしか行われないとすると、焦点の理解は、問答関係によって<のみ>可能である、と

<sup>8</sup> スペルベル&ウィルソン『関連性理論』研究社

言えるだろ。

#### 4、CTのもう一つの証明

CTを証明する方法はこれ以外にも多数あるかもしれない。以下では、別の視点から証明したい。我々は、次のテーゼ3と4を証明できれば、そこから容易にCTを証明できるだろう。

テーゼ3 「コンテクストにおける発話の意味の理解は、デフォールト推論によって行われている」

テーゼ4 「デフォールト推論は、その結論を答えとするとする問い合わせとの関係によってのみ可能になる」

##### (1) テーゼ3の証明

発話の意味を論じるときに、焦点だけを論じるのでは、たとえそれが発話にとって本質的な意味であるとしても、断片的な印象を免れないで、ここでは別の角度から証明を試みたい。「発話の意味は、コンテクストの中でのみ理解可能である」ということは、一般に認められていると見なしてよいだろう。ところで、コンテクストから発話の意味を理解する（発話の意味を確定する）場合に、我々は、コンテクストを前提として、そこから発話の意味を推論している。つまり、「コンテクスト（前提）から発話の理解（結論）が導出されるときには、推論が行われている」と考えてよいだろう。さらに、その際に、その推論は、古典的な演繹推論ではなくて、デフォールト推論である。このことを次の例で説明しよう。

(1) 「ジョンは、タイムズを買った」

この発話は、少なくとも次の二つの意味をもちうる。

(2) 「ジョンは、タイムズ紙を買った」

(3) 「ジョンは、タイムズ社を買った」

ふつうは我々は、このいずれであるかは、コンテクストから簡単に決定できる。

(4) 「ジョンは、今朝駅のキオスクに立ち寄った。そして、ジョンはタイムズを買った」

(4)のコンテクストでは、ジョンはタイムズの朝刊を買ったという意味になるだろう。

(5) 「ジョンは、今朝証券会社に電話した。そして、ジョンはタイムズを買った」

(5)のコンテクストでは、ジョンはタイムズ社の株をかったという意味になるだろう。(1)の発話は、それだけでは多義的であるが、コンテクストの中では、意味は簡単に一義的に決まるように見える。前述のように、コンテクストが前提となって、発話の意味（結論）が導出されている。一見したところこの場合には、一定のコンテクスト（前提）から無数の結論を導出することが可能であるようにはみえない。しかし、そうではない。

(6) 「ジョンは、今朝駅のキオスクに立ち寄った。そして、ジョンはタイムズを買った。いつも彼は、キオスクの電話で株を買うのだ。」

(6)の場合には、ジョンがタイムズ社の株を買ったという意味になるかもしれない。

(7) 「ジョンは、今朝駅のキオスクに立ち寄った。そして、ジョンはタイムズをかった。

いつも彼は、キオスクの電話で株を買うのだ。しかし、今日は株式観を見ただけで買うのをやめた。」

(7)の場合には、タイムズの朝刊を買ったという意味になるだろう。このように、(5)の発話にさらに

別の発話がつけ加わることによって、(1)の発話の意味は変化する。もちろん、(5)と(6)と(7)とでは、コンテクスト（前提）が違っているのであり、そのために発話の意味（結論）が変化したのだといえる。しかし、(5)においてコンテクスト（前提）を構成していた発話そのものが変化したからではなくて、別の前提が加わったために、別の結論が生じたのである。今仮に

(8)  $p \vdash x$  (p、q、xは命題記号とする)

(8)という推論が成り立っているとしよう。

それに別の前提が加わるとこうなったのである。

(9)  $p, q \vdash \sim x$

(8)と(9)がともに成り立つということは、古典論理学では普通はありえない。論理的にこれを説明するには、ここに別の暗黙の前提Dnが働いているのだと見なければならない。

(10)  $p, D1 \vdash x$  (D1、D2は、命題の集合を示す記号)

(11)  $p, q, D2 \vdash \sim x$

コンテクストが、常にひらかれており、別の発話がつけ加わることによる変更の可能性がつねに残るのだとすれば、それは、コンテクストから発話の意味を推論するときには、つねに上のようなDnが残るということである。

我々は、たとえば、(10)のD1を反省熟考によって明言することはできないだろう。なぜなら、D1を明言できたとすればそのときには、それにどのような発話がつけ加わっても、結論はもはや変化しないことになるからである。そのようなことは、どのような発言も、別の発言がつけ加わる事によって変更の可能性があるということに矛盾するのである。

すくなくとも、実際には、D1を言明しようともしていないし、その存在を意識すらしていないにもかかわらず、(10)のような推論をしているのだとすると、その推論は、演繹推論ではない。この推論では、結論は一義的には決まらない。つまり、同じコンテクスト（前提）から、反対の結論を導出することが可能なのである。たしかに、例えば(4)のコンテクストでは、ジョンはタイムズの朝刊を買ったという意味に理解するのが普通だろう。しかし、ジョンはタイムズ社を買ったという意味にとることが、論理的に不可能であるわけがない。

## (2) テーゼ4の証明

テーゼ4 「デフォールト推論は、その結論を答えとするとする問い合わせとの関係によってのみ可能になる」

演繹推論でも、ましてやデフォールト推論ではなおのこと、どのような一定の前提からも論理的に導出可能な結論は、無数にある。自明のことかもしれないが、一応説明しよう。演繹推論において、与えられた一定の前提から結論を導出するときには、論理的には、無数の結論の導出が可能である。三段論法での例を挙げれば、「sはmである」「mはpである」という二つの前提からは、「sは～mでない」「あるmはsである」「ある～sは、～mである」「sはmである、かつaはaである」などが導出でき（これらは「sはmである」だから直接推理できる結論）、また、「mは～pでない」「あるpはmである」「ある～mは～pでない」「mはpである、かつaはaである」などが導出でき（これらは「mはpである」だから直接推理できる結論）、また、「sはpである」「sは～pでない」「あるpはsである」「ある～sは～pである」などが導出できる。

さらに、例えば、これら一つ「 $s$  は  $\sim m$  でない」からは、「 $\sim m$ 」にそれに属する種概念や個体概念をいれるとほとんど無数の命題を作ることができるだろう。「 $\sim s$ 」「 $\sim p$ 」についても同じことがいえる。このように演繹推論でも、一定の前提から論理的に導出できる命題は無数あるのだから、デフォールト推論の場合には、それ以上に多くの命題を結論とすることが可能である。

このように前提から論理的に導出できる結論が一つに確定しないにも拘らず、一つの結論が導出されるということは、前提がその結論の導出を促すのではなくて、結論の導出を促すものが他にあるということである。では、発話の理解において、結論を出すように促すメカニズムとはなにだろうか。それは、問い合わせが与えられてそれに答えるためにデフォールト推論が行われているということである。デフォールト推論に限らず、推論においては、与えられた前提から多数の結論をどう出でできる可能性が開かれており、その中からの選択はその問い合わせの答えを求めるというメカニズムなくしては成立しないとおもわれる。

以上から、テーゼ4「デフォールト推論は、その結論を答えとするとする問い合わせとの関係によってのみ可能になる」を証明できたといえるだろう。それともくのみ>の証明が出来ていないだろうか。

付注：コリングウッドは、『自伝』の第5章「問い合わせと答」と題する論文で、問答論理学という立場を主張している。そこでの基本的な主張、つぎの3つのテーゼにまとめることが出来るだろう。

- 1 「命題を理解するには、それが答えようとしている問を理解しなければならない。」
- 2 「いかなる二つの命題も、それらが同一の問題に対する解答でないかぎり、互いに矛盾はしない」（コリングウッドp.43）
- 3 「真理は、いかなる单一の命題にも属さず、また統一理論者たちの主張するような、諸命題をひつくるめた複合体にさえも属するものではなくて、問題と 解答とからなる複合体に属するなものである。」（p.47）

コリングウッドは、これらのテーゼを確信しているが、充分な証明をあたえてはいない。もしこれらのテーゼを証明できたならば、それは哲学の大きな変革につながるだろうと思われる。本論は、この中の第一のテーゼの証明の試みである。